

文化財  
NEWS速報

## 回向院橋本左内の墓套堂一件

套堂内にあった橋本左内の墓石  
(移設前に保存修復が行われる)

解体工事作業風景

解体工事前の実測調査  
(手前が套堂。奥に景岳橋本君碑が見える)荒川ふるさと  
文化館だより

荒川区教育委員会  
荒川ふるさと文化館  
荒川区南千住 6-63-1  
TEL 03(3807)9234  
登録 (17)0029-2号

**左内の墓の套堂** 橋本左内の墓は回向院入口右脇にありました。左内の墓石は套堂に納められ、さらに近くには左内の業績を顕彰した景岳橋本君碑が建っていました。この套堂は、昭和 8 年（一九三三）に左内を崇敬する景岳会によって建てられました。目的は、墓石の風化や破損を防ぎ、遺徳を偲ぶ空間を創造することにありました（事実、左内の墓は当時のもの）。関東大震災後に注目された鉄筋コンクリート製で、表面

**回向院に史跡エリア** 回向院では、昨年から墓地整備と回向院会館建設からなる境内整備事業が進められ、墓域の北側に史跡エリアが新たに設けられることになりました。境内に分散している文化財を一ヵ所に集め、一般の見学者に便宜を図ろうとういうものです。

**史跡小塚原刑場跡** 南千住駅西側の回向院（南千住五丁目）は、江戸幕府の刑場の一つ小塚原刑場跡（区指定文化財・史跡）として知られています。境内には、杉田玄白らの脇分けの実見を記念した觀職記念碑、橋本左内・吉田松陰・頼三樹三郎ら幕末の志士たちの墓（以上区登録文化財・史跡）、景岳橋本君碑（区登録文化財・歴史資料）など多くの文化財が残されていて、区内だけでなく全国からの見学者が日々訪れます。

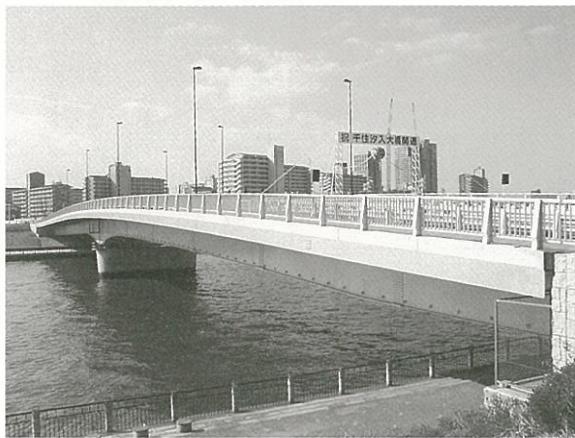
**墓も、史跡エリア内に移動することになりましたが、敷地面積の都合で套堂移転は困難になり、行き場を失ってしまいました。そんな時にあがつたのが「南千住のシンボル的文化財である左内の套堂を守ろう！」という町の皆さんのが声でした。有志の方々が年末の年越し準備の合間に町の隅々を回り、2週間ほどの間に 800 人近くの署名が集まりました。やがて町の皆さんの熱い思いは、套堂移転保存に繋がっていました。套堂は回向院から区に託されました。套堂は回向院から区に託されることになり、1月末に解体保存の作業が行われました。套堂は左内の墓石を守る役割を終え、次の出番を待つことになったのです。やがて地域の歴史を伝えるために、皆さん**

に人造擬石洗出し仕上げを施した近代仏教建築です。設計建築に当たっては、東京帝国大学文学教授・文学博士・国宝保存会委員などの片書きを持つ黒板勝美、同大教授工学博士・史蹟名勝天然記念物保存協会評議員の伊東忠太が監修を、また東京美術学校教授・文学博士の沼田一雅が橋本家紋章デザインを行つており、当代一流の歴史学者、建築家、芸術家の知識・技術・感性が結集して完成了近代の文化的遺産といえます。

# 専門員は見た！ （7）

汐入の変遷

## 千住汐入大橋の開通と 石仏の行方



●千住汐入大橋（平成 18 年 2 月 18 日撮影）  
足立区側からのぞむ。対岸が汐入。

**千住汐入大橋の開通** 平成 18 年 2 月 18 日、隅田川に架かる新しい橋の開通式が行われた。橋の名は「千住汐入大橋」、その名の通り足立区千住曙町と汐入（南千住八丁目）を結んでいる。ここは、かつて「汐入の渡し」があつたところで、鐘ヶ淵紡績などの工場で働く人びとの通勤路の役割を果たしていた。渡しは昭和 42 年（一九六七）に姿を消すが、橋の開通によって、この二つの地区は 39 年ぶりに再び結ばれたことになる。

開通式では、テープカットとくす玉割りの後、足立区側から渡り初めが行われた。

千住汐入大橋は、両隣に架かる千住大橋や水神大橋に較べてやや小振りだが、低い欄干以外に構造物が無いので橋を渡っている時の見晴らしがよい。かの幸田露伴は、著書『水の東京』で、汐入辺りの川面から見る月が素晴らしいと書いているが、この橋上からの月見が新しい汐入の風情となるかもしれない。

### 二つの石仏の行方

隅田川を渡り対岸の足立区千住関屋町に落ち着いていたのは、かつて汐入の寄洲に祀られていた「舍利骨様」といわれる石仏である。この石仏が千住関屋町のとある会社の敷地にあると分かったのは今から 5 年前であった（『文化館だより』7 号）。その後、そこを通ると工事中になつていて、ずっと気になっていたが、先日あらためて訪れてみると、改築された会社の敷地に大切にお祀りされていて、ほつと胸を撫で下ろした次第である。

もうひとつ、一時行方知れずとなつたのは（あくまで筆者の目からだが）、「延命地蔵」だ。この地蔵は一名を「隅田川地蔵尊」ともいい、汐入水門のすぐ脇に祀られていた（下写真）。地蔵の横にある

石碑に刻まれた縁起によると、隅田川駅にあつた船渠（ドック）で事故死した人たちの冥福を祈るために昭和 9 年に建立したという。汐入水門とともに隅田川駅の歴史を語る貴重な文化財ともいえる。ここが長く工事用フェンスに囲まれていたこともあつて筆者はこの地蔵を見たことがなく、忽然と姿を消してしまつたと思っていたが、最近になつて隅田川駅の東南隅に移動していたことが分かつた（ちなみに汐入水門は『文化館だより』13 号でも取り上げたが、瑞光橋公園整備によつて、すでに撤去され、遺構として土台が残されている）。

今から約 80 年前の大正時代、有馬頼寧は明治以

降の近代工場の進出や震災の影響などで激変する南千住や汐入の様子を「汐入村の変遷」（『郷土会記録』大正 14 年）に書き留めている。そのなかで有馬は、今後どのように変化するかは分からぬが、と前置きしたうえで、それでも汐入にはまだ江戸の農村風情が残つてゐると述べている。

今また、汐入は再開発事業により激変期を迎えている。しかしわざかではあるが、かつての町の姿を窺える足跡がまだそこかしこに残されていることも確かだ。有馬が記録しているように、今後どう変わつていくかは分からぬが、これからも消えゆく汐入の名残り・変遷をつづっていくことができればと思う。

（弥永浩二）

### 【ひとりごと】開通式のテープカットといえば鉄。

以前、横浜開港資料館の企画展「リバーサイドヒストリー 鶴見川」展で橋の開通式のテープカットに使用した鉄が展示しており、何気なく見ると「長太郎」の銘がある鉄で驚いたことがある。「長太郎」といえば南千住に代々続く「ラシャ切鉄」職人のブランド。区指定無形文化財の「三代目長太郎」と石塚昭一郎氏のお父様の作品だろうか。今回のテープカットではどんな鉄を使うのか、密かに注目していたのだが、式典の最中に近寄つて見るわけにもいかず、確か認ができなかつた。ご存知の方はご一報を。



●延命地蔵（昭和 58 年撮影）  
当時は汐入水門の脇にあった。

## 街角のしるし④

# 南千住三角点の謎

三角点とは 街角で、レベル（望遠鏡のような形で高さを測る測量機器のこと）とスタッフ（巨大な物差し。3m、5mと長い）を使って、測量している人たちを見かけたことはないだろうか。あの人はちは、建設工事で土地の高さや位置を測つたり、地籍調査などで必要になる土地の境界、正確な地図の作成をしている。発掘調査においても、測量（実測とも呼ぶ）は欠かせない作業の一つである。調査地、遺構、遺物が発見された地点の高さを測り、これを記録する。

高さを測るといつても、私たちが立っている地点の高さの数字は、さらに計算しないと出でこない。標高がわかる基準点（三角点、水準点含む）＝原点を利用し、原点を移動させて「調査地の基準点」を設置する。そもそも、三角点とは「場所の基準」であり、座標がわかるものだが、高さもわかる。地図記号は、その名の通り「△」である。一方、水準点は「高さ」の基準であり、その場所の標高が何mなのかが正確にわかるが座標はわからない。地図記号は「□」で表す。

これら基準点は、全国で合わせると数万点設置されているが、いざ、自分が住んでいるエリアを見渡すと案外少なく、区内では、三角点、水準点、東京都公共基準点を合わせても十数点しかない。測量の際は、当然高さを知りたいポイントに一番近い基準点を探すが、場合によっては数キロ移動しなくてはいけないこともあるのだ。

“敷石”にしか見えないさて、以前の話になる

う、三角点がナナメになつてゐるんですが…」  
国土地理院（以下【国】）「えつ！調べてみましよう

《：数分後：》そこは埋設になつていますよ」

【専】「埋設ですか？ 埋まつているつてことですか？」  
【国】「はい、ですか、多分それは蓋ですねえ」

【専】「ええつ！ 蓋なんですか？」  
【国】「はい、相当重いと思いますので、無理なさらないで下さい」

【専】「…」  
【国】「はい、相当重いと思いますので、無理なさらないで下さい」

【専】「…」  
【国】「はい、ですか、多分それは蓋ですねえ」

調べてみると、「敷石」に見えたのは「蓋石」と呼ばれる、下に埋設された三角点を保護するケースのフタだった。そういうえば、確かに別の調査で使つた時の基準点は道路下に埋設されていた。うかつなエピソードをまた一つ増やしてしまつていたのである（後日、無事、フタを開けて測り直した）。

ちなみに、測量するときや三角点・東京都公共基準点を利用するときは、土地所有者の了承と国土地理院や東京都土木技術研究所（点の種類によつて異なる）に申請が必要になるのでご注意を。

〈八代和香子〉



三角点ではなくフタ（蓋石）



フタを取ったら現れた三角点

当館専門員（以下【専】）「あの

## 文化館繁盛記②

### ラシャ場の絵馬が あらかわへ戻ってきた!!

#### （流転の絵馬その後）

以前、『文化館だより』12号の表紙を飾った千住製絨所（通称ラシャ場、現在の南千住六丁目）の絵馬。明治10年（一八七七）10月、ラシャ場建設に関係した人びとの手によって、南千住の鎮守である素盞雄神社に奉納されたものです。江戸琳派の流れをくむ千住在住の村越向栄という地元の絵師により描かれました。ラシャ場の建設に携わる職人の姿がいきいきと描かれ、当時の風俗等がわかる資料としても貴重なものです。

さて、この絵馬が、平成17年10月、荒川区に寄贈されました。

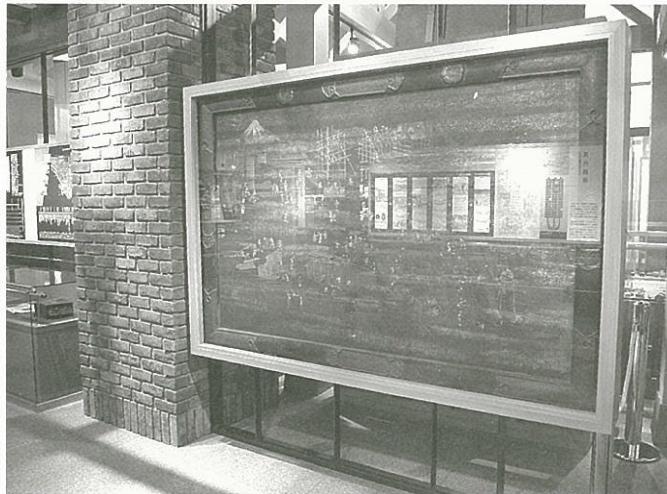
同15年度の文化館企画展「日本羅紗物語－千住製絨所とあらかわの近代－」で当時の所蔵者であつた陸上自衛隊松戸駐屯地から、絵馬を借りたことからでした。郷土史親交会をはじめとする地域住民及びラシャ場関係者の皆さん、「ゆかりの深い絵馬を南千住で保存したい。是非、絵馬を南千住へ戻そう」としたのです。

絵馬を見た郷土史親交会は区や陸上自衛隊にその思いを伝え、また、当時の関係者の皆さまのご協力を得て、絵馬は区へ寄贈されることになりました。同17年10月8日、絵馬が千住製絨所ゆかりの地に戻ってきたことを記念する「日本羅紗物語 part・2 おかげり、ラシャ場の絵馬」展が開催されました。そのオープニングセレモニーでは、陸上自衛隊及び郷土史親交会や地域住民の方、

ラシャ場関係者からなる千絨会の皆さんのご参列をいただきました。スポーツセンターにある井上省三君碑、井上省三胸像、ラシャ場関係者が所蔵していた数多くの資料、そして絵馬。ラシャ場のものは、次々に南千住へ帰つてくる、そんな言葉がきかれる程、様々な文化財は、今後もあらかわの宝として次世代へ継承していきましょう。

（加藤陽子）

こちらで紹介しました絵馬は、今年2月末から、当館の常設展示室、近代のラシャ場展示コーナーにて公開しています。ぜひ、ご覧ください。



●このたび常設展示室に飾られたラシャ場の絵馬

## 文化館おすすめ

### 史跡めぐりコース③ ひぐらしのさと編



●滝沢馬琴筆塚の碑／青雲寺  
区指定文化財・歴史資料。

#### ひぐらしのさと編

江戸時代、「ひぐらしのさと」（現西日暮里三丁目付近）と呼ばれた地域は、風光明媚な場所として四季折々楽しむことができた。春といえば花見寺（青雲寺・修性院・妙隆寺）の桜で、多くの浮世絵に描かれるほど、春の景色が有名だった。江戸の人びとは花や風景を愛でに訪れた。そんな「ひぐらしのさと」は江戸の文人たちにも愛され、彼らにまつわる史跡が数多く残っている。その中から二つほど「ひぐらしのさと」と文人たちの関係を示す史跡・文化財をご紹介しよう。

一つめは花見寺の一つ青雲寺にある「南総里見八犬伝」で有名な「滝沢馬琴筆塚の碑」である。筆塚とは使い古した筆を供養し埋めた塚のことで、この馬琴筆塚の碑は文化7年（一八一〇）落成した。前面の碑文は亀戸鵬斎の筆・撰文による。なお、最初馬琴は亀戸天満宮に作ることを希望したとか、しないとか。馬琴の「吾仮乃記」に詳しい。

筆塚は当初、青雲寺境内の山上（現在の西日暮里公園）にあつたが現在は移設されている。ちなみに

今も昔も人間にとって恐ろしいものは、突然やつてきて、しかも爆発的に広まり、多数の人の命も奪い去っていく流行病であろう。このところ話題の鳥インフルエンザ。必ずや克服する日が来ることを信じつつも、心の奥底では誰しも感染の不安を抱いている。これが病気についての科学的な知識がなかつた江戸時代ならなおさらである。この瓦版(写真)は、安政 5 年(一八五八)、コレラ流行の際に発行されたもので、ユーモラスな画面の中に人々の不安や動転ぶりが読み取れる。



●「厄払い」(当館蔵)

長崎に上陸したコレラは、瞬く間に東進

し、七月には江戸に到達した。感染力の強

さは「即時に病みて即時に終れり」(『武江

## 過ぎゆく季節へのたより II

### 安政 5 年の瓦版「厄払い」を読む

## 春よ来い! 気の早い「節分」

年表」というあり様。瓦版の番付には火葬三昧場(火葬場)、早桶屋職人等のコレラで儲けた葬送関係者が多忙な商売として名を連ねるが、揶揄された当人も、夕べに犠牲者を弔い、朝には弔われる側に回りかねない状況だった。その惨状は『安政箇労病流行記』(当館蔵)の火葬場の混乱の様子から伝わってくる。江戸中の寺院、火葬寺(火葬場)めがけて遺体が運び込まれ、たくさんの棺桶が野積みになった。秋とはいって、遺体の腐敗は否応なしに進む。小塙原の火葬寺周辺も耐え難い臭気が漂い、延々と葬列が続いているといふ。

遺体の臭気を感染源と考え、対策として医者は

埋葬を勧めたが、他にいくつもの犯人が取りざたされ、その予防方法が片端から試された。まず、鮮魚感染源説。中でも鯛は最も悪玉とされ、食卓から姿を消した。その余波で飲食業が軒並み傾きかけた。玉川上水に毒が入っているという噂も出た。これら感染源候補は的を得ているようで、どこかズしており根本的な解決にはならなかつた。そのとばつかりを受けた氣の毒な職業は、瓦版の番付では一番暇な商売とされた水道の水汲(水売り)、そして夕河岸の鰯買、屋台の天麩羅屋、夜蕪麦商人などであった。

病魔の勢いは一向に衰える気配さえない。こういう時は、困ったときの神頼み。

神輿・獅子頭の渡御、病魔を払う天狗の羽団扇に見立てたヤツデの葉っぱを軒先に飾る者、門に御札を貼り付ける家も登場。一年間の行事を凝縮したような騒ぎになつてていく。とうとう、こんな年は早く過ぎてほしいと、門松を立て、注連縄を張る家まで登場し、果ては節分の豆まきを始める始末。

それに便乗したのが本来は節分に現れる厄払いの行者だった。「御厄払いしましう」と家々を廻り、年の数の豆と少額の錢を包んだ白紙のおひねりを貰い歩いた。背中には、江戸中で払ひに払つた狐たち。果たしてこの氣の早い年越しに効き目があつたのかどうか、それは皆さんのご想像にお任せしよう。

(野尻かおる)

【参考】『増訂武江年表』2(平凡社)、『守貞謹稿図版集成』(雄山閣)、立川昭一『江戸病草子』

(ちくま学芸文庫) 等

### おすすめ基礎コース

青雲寺

← ● 滝沢馬琴筆塚の碑 ● 日暮里舟繁松の碑

修性院・妙隆寺跡

← ● 日尾荊山衣帳碑  
諭方神社

← ● 諭訪台

本行寺

● 道灌丘碑 ● 市河寛斎・米庵の墓

\* 寺院の境内に入る際には、事前にご連絡の上、所有者あるいは管理者の指示に従ってください。  
※ 檜家・一般参拝の方もいます。周りの人に迷惑がかからないように鑑賞しましょう。

春爛漫のこの時期。遠出も良いが江戸の文人たちに愛された身近な場所を訪れてはいかがかな。  
(加藤陽子)

文が刻まれている。  
それが現在も残る「自堕落先生の碑」である。碑には、「自堕落先生之墓」という文字と、自撰の追悼文が植えて、そのそばに墓石まで作つてしまつた。それをもじる「自堕落先生の碑」がある。碑に桜を植えて、そのそばに墓石まで作つてしまつた。それが現在も残る「自堕落先生の碑」である。碑に桜を植えて、そのそばに墓石まで作つてしまつた。それが現在も残る「自堕落先生の碑」である。碑に桜を植えて、そのそばに墓石まで作つてしまつた。

二つめは養福寺にある「自堕落先生の碑」である。自堕落先生とは、俳人でもあった山崎北華のことである。彼は、数え 40 歳になるのを機に自分の葬儀を養福寺で執り行つた。元文 4 年(一七三九)12 月晦日のことである。棺桶に入り、そこから飛び出し衆人を脅かし、その後踊り遊んだという。後日しだれ桜を植えて、そのそばに墓石まで作つてしまつた。

区外に刻まれた区の歴史①

## ゆくとび くるとび



痕跡に出会つたならば、ご一報を！  
来る鳶

### 行く鳶

享保 5 年（一七二〇）に成立した、町火消いろは 47 組。何となく江戸市中のことのような気がして、荒川区と余り関係がないように思われるかもしれない。が、実は現荒川区域でも、町火消の鳶たちが活躍していた。ぬ組とれ組である。ちょっとと聞き慣れないかもしないが、いざれもいろいろは 47 組に所属する歴とした町火消である。

ぬ組は、下谷金杉、同竜泉寺、同通新町辺を管轄し、素盞雄神社境内にある金属製の手水鉢に名残を留めている。もう一方のれ組は、谷中感應寺門前、

谷中町、千駄木町、池之端七軒町辺を管轄した。このエリアは、ほぼ諏方神社の氏子域と重なる。同社境内には、彼らが奉納した狛犬などが残っている。これら奉納物は、彼らの信仰の証であるし、彼らの足跡もある。したがって、このような奉納物は、現区域に止まるものではない。現在、当館が把握しているれ組の奉納物は、表の通り。

表の通り、今日の私たちと同じように、一箇所に止まつているわけではなく、あちこちの寺社へ出かけているのである。だから、皆さんのお出かけ先の寺社へは、ずっと昔に「れ組」の方が行つてい場合だつてなきにしもあらず、だ。もし、彼らの

ついでながら、行く鳶もいれば、来る鳶にもいる。  
否、この場合、職業柄駆けつけたという方が正確かもしない（以下文末まで、『藤岡屋日記』3）。

時は、弘化 4 年（一八四七）9 月 21 日。お天気続いで、空気は乾燥していた。遠くに見えるは、立ち上る煙。下谷坂本通で出火だとして、やつてきたのは、当時上野辺を担当していた毛利家お抱え大名火消の面々だつた。が、行ってみると、それは小塙原の仕置場で執行されていた火あぶりの刑による火煙だつた。火あぶりの火は、幕府刑罰だから、火消が消す火ではない。

そこで一句。

あぶらるゝ 大に追善の大消哉

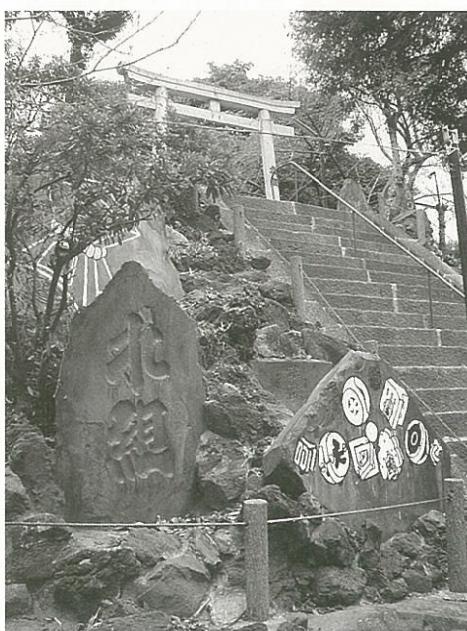
\* 図版の掲載にあたつて、天祖神社にご協力を得ました。  
記して感謝申し上げます。

（亀川泰照）

表 “れ組” が刻まれた石造物

	石造物	年	備考
区内			
諏訪神社	玉垣	文化 4 年（1807）	
	狛犬（一对）	文化 6 年（1809）	明治 41 年（1908）修復 昭和 43 年（1968）再建
区外			
富士神社（東京都文京区）			
	奉納碑	未詳	
	鳥居	明治 5 年（1869）	昭和 46 年（1971）再建
	奉納碑	未詳	
妙法寺（東京都杉並区）			
	灯籠	安永 2 年（1773）	大正 12 年（1923）修復
	常夜灯	文政 4 年（1821）	
大山阿夫利神社（神奈川県伊勢原市）			
	鳥居	寛政 10 年（1798）	明治 21 年（1888）再建
丸亀（香川県琴平町）			
	灯籠	嘉永 4 年（1851）	

\* 所在については、『江戸消防』（江東消防記念館、2004 年）などを参照



●駒込富士神社のれ組奉納碑

階段を上ったところにある鳥居もれ組より奉納。

あらかわ  
タイムズ⑫

## 上尾久村の仇討ち



文政 9 年（一八二九）というから、今から約 180 年前も昔のこと。2 月 14 日の同じ日に、上尾久村で 2 人の名主が死んだ。「上尾久村は、6 人の旗本領と東叡山領からなり、それぞれに名主がいた」。こういった事件はそのうち忘れられてしまうのが世の常だが、当時は、結構話題になるもので、当時、仇討ち事件として、瓦版まで出た形跡が残つている。あの滝沢馬琴が参加していた、兎園会とえんかいでも話題に上った（『日本隨筆大成』第一期 5 卷）。

兎園小説余録の伝えるところ 元来、小台の渡しは、「百姓渡し」として、旅人は乗せないというルールをもつて、お上から公認されていた（勿論、これは建前で、田端操車場付近には、「右西新井大師道」

船口場迄十五丁」と刻まれた道標が建つているようだ。そしてこれを快く思わない人物が、いま一人の名主 B さんだった。B さんは常日頃このことを不快に思っていたらしく、ある日、A さんに対し、そのことを問い合わせた。ところが、A さんは、全く聞き入れる気配はない。

2 月 14 日の日、怒った B さんは、過激にも A さんを討ち果たさんと、屋敷へ乗り込んでいった。ところが、返り討ちにあつてしまふ。そんな現場にやつてきたのは、B さんの養子 C さんだった。養父の様子を案じ、跡を追つたのだというが、本当のところは分らない。ともかく、C さんは、養父が息絶えて

いるのを見て、即座に A さんを切り殺してしまう。

かくて、小台の渡しの渡し賃をめぐつて、二人の名主があの世へ旅立つた。だが、この世に残つた C さんは、相応のお裁きを受けなくてはならない。しかし、最初、領主のところで行われた取り調べはなかなか埒があかず、勘定奉行所へ上げられた。A さんの子が、我が親 A さんと、B さんが取つ組み合いになつてゐるところへ C さんがやつてきて、A さんを切ろうとして B さんも切つてしまつた、と証言していたのである。そうならば、C さんは、親殺しの重罪。罪の重さが全く違つてくる。

残念ながら、これ以降の C さんの行く末を知ることができない。というのも、これ以降のことを示す、当時の資料にお目にかかる事はないからだ。

事件の真相は、本当に闇の中なのか？ 実をいうと、以上は、昨年の古文書講座の中で新たに判明した、歴史上的の事件である。講座では、「小泉家文書」を読んでおり（荒川区登録有形文化財。とかく癖のある文字で、読みづらいとあまり評判がよくなかったが）、そちらでは単に「当月十四日横死仕候一件」とされていた。だから、「兎園小説余録」を見つけて、事の次第がわかり、参加者一同、大いに喜んだもの

だが、顛末が知れない気持ち悪さが残つた。

が、古文書講座修了生の有志が集まつて作つたサークルは、あきらめていなかつた。過日、新たな資料を収集してきた。その資料によれば、C さんは、A さん殺害後、直ちに自身の領主である、阿部家に

### 当館の古文書講座のご案内

○2～3月頃 初級編（毎週1回）

○5～12月 中級編（毎月1回）

\*また、講座修了生有志が、毎月1回づつ集

まり、活動しています。一つは、千住の材

木問屋伝來の古文書を読んでいるサークルで、およそ 5 cm もある簿冊に取り組んでいます。もう一つは、講座の中で字起こしした「小泉家文書」を読み解く活動をしているサークルで、このコラムの執筆にあたりご教示を得ました。当館では、その成果の公開をお手伝いしていく予定です。

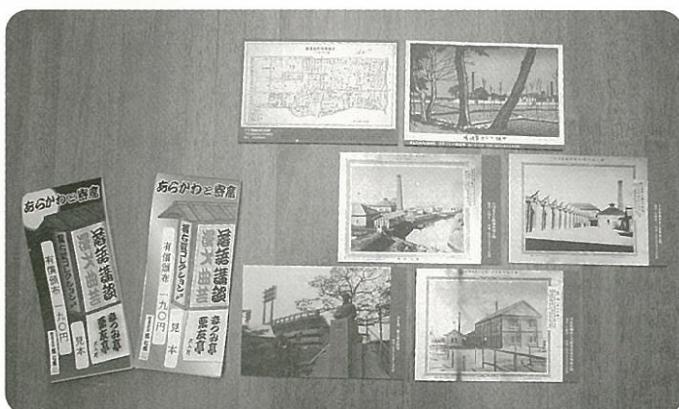
## 文化館でお買い物

博物館に行った折り、ついつい手に取ってしまうミュージアムグッズですが、当館にもあります。いずれも、身近において、区の歴史・文化に親しんでもらいたい、ということで作られたものです。

当館のミュージアムグッズは、下記の 2 点。絵葉書は、千住製絨所ニラシヤ場の古写真です。一筆箋は、寄席文字の橋右橋さん（荒川区登録無形文化財）のデザインによるものです。

常設展示室入口にて販売中。なお、展示解説図録各種も併せて販売しております。

- 千住製絨所絵葉書 ￥220
- あらかわと寄席一筆箋 ￥190



●一筆箋と絵葉書



- コミュニティバス さくら  
／「南千住図書館停留所」→徒歩 1 分
- 都バス 浅43系統／「千住大橋停留所」→徒歩 3 分
- JR常磐線・東京メトロ日比谷線・つくばエクスプレス／「南千住駅」→徒歩 8 分
- 京成線／「千住大橋駅」→徒歩 8 分
- 都電荒川線／「三ノ輪橋駅」→徒歩 15 分

## 平成 18 年度荒川ふるさと文化館 展示・講座のお知らせ（上半期）

### 展示・イベント

#### ■速報！あらかわの文化財展

期間：開催中～4月 23 日（日）

#### ■牧野徑太郎コレクション展

期間：4月 29 日（土）～6月 25 日（日）

内容：近代文学の日本浪漫派と文学青年たちの姿を、詩人・牧野徑太郎氏の交友関係を中心に紹介

#### ■皆川号外コレクション展 part4

期間：7月 22 日（土）～9月 24 日（日）

内容：天災ニュースの形のバリエーションを紹介

#### ■第 27 回あらかわの伝統技術展

期間：9月 8 日（金）～10 日（日）

会場：荒川総合スポーツセンター

### 講 座

#### ■古文書講座 中級編

5～12 月の第 3 金曜日（事前申し込み制）

#### ■地域史講座 南千住篇Ⅲ

6・7 月予定（事前申し込み制）

#### ■夏休み子ども博物館

7・8 月予定（事前申し込み制）

※この他、毎月最終土曜日に当館専門員による常設展示等の案内があります。詳しくは荒川区 HP・区報等でお知らせしていきます。

### 利用案内

開館時間：午前 9 時 30 分～午後 5 時（入館は 4 時 30 分まで）

休館日：毎週月曜日（月曜日が国民の休日の場合、その翌日）。

年末年始の 12 月 28 日～1 月 4 日。

入館料：100 円

（区民の方で、中学生以下、65 歳以上、障害者及びその介助者は無料）

荒川ふるさと文化館だより第 16 号

発行 2006 年 3 月 31 日

編集・発行 荒川区教育委員会・荒川区立荒川ふるさと文化館

荒川区南千住 6-63-1

03-3807-9234

印刷 (株)マステック

©ARAKAWA FURUSATO MUSEUM